

## 第46回日本高次脳機能障害学会に参加して

言語聴覚学専攻専攻長 塚本 能三

日本高次脳機能障害学会は、1968年に発足された「日本失語症研究会」が前身である。1983年に「日本失語症学会」に改名され、長谷川恒雄伊豆菰山温泉病院院長が初代理事長となった。さらに2003年より現在の名称となり、脳研究に関わる広い職種の専門家により、毎年多くの研究発表がなされる場として発展した。

今回の第46回学会長は平山和美山形県立保健医療大学特任教授であった。平山会長は「主役はあくまでも一般演題である」という本学会の伝統を引き継ぎ、学術総会のテーマを「感じる高次脳機能」としたことの経緯を述べている。今回、私はこのテーマで行われた①シンポジウムと一般演題2題②③に関わったので報告する。(尚、③については本校大学院の青木健太院生が別稿で報告するのでテーマの記載のみとする。)

①「輪郭線だけがわっとあるように感じる世界とは? - 実物/写真/線画はどう見えるか -」は星ヶ丘医療センターの竹田奈央子STの症例である。故柏木敏宏先生が体調を壊され、私が引き続かせていただいた経緯がある。さらに、奈良学園大学の西川隆先生にご尽力をいただき完成に及んだ。結果、第20回長谷川賞を受賞することができ、待たずしてご逝去された柏木先生にお用いをすることができた思いが残る論文である。本論文の特筆すべきことは、奥行き知覚の障害により生じる高次脳機能障害をクローズアップできたことである。過去に報告例はない。今まで教科書的には視覚的に認知しやすいとされるのは、実物であり、そして、写真、線画とされてきた。ところが、本症例では逆転現象が生じ、線画に続き写真、そして実物の視覚的認知に困難を示した。この現象のメカニズムについて検証を通して、以下の通りに考えた。線画の認知においては、表面の性質や奥行きは関係せず、輪郭情報が重要であ

る。一方、実物や写真では「陰影」、「凹凸」、「色」、「きめの勾配」など表面の性質情報が重要であり、また、実物は奥行き知覚が必要となる。本症例は輪郭情報の入力には保たれ、奥行き知覚に関わる陰影情報の入力に障害があった。主訴である「輪郭線だけがわっとある」「階段が平面に見える」からも、本症例の見え方の障害がよくわかる。画像所見としては左右の後頭葉から側頭葉の内側面に病巣が見られ、中でもV4野(紡錘状回と舌状回に相当)の損傷部位が責任病巣と考えられた。V4野は陰影情報、細かい奥行き知覚を担い、輪郭情報は後頭葉の外側面に関わるとされている。本症例は、後頭葉外側面が保たれていたために輪郭情報に基づく対象の認知は比較的保たれていたが、V4野の損傷のために、陰影や奥行きの情報を統合し、立体感のある対象として認知することが困難となったと考えられた。

②「不安定な同側性病的把握現象を呈した1例について」は今村病院の赤津花凜STの症例である。把握反射と本能性把握の発現機序は異なるとされている(田中, 1996)。把握反射は自発的な開放は困難とされている(Seyffarth, H. Denny-Brawn, D. 1948)。本例は覚醒度が低いと原始的な把握反射が、覚醒度が上がると能動的な本能性把握が優位に出現した。特徴的なことは、これら病的把握現象が生じているときに、物品を把握しては投げ捨てる反応(回避反応様)が生じたことで、病巣との関連も含めて報告した。

③「無動無言症から超皮質性混合失語、さらに超皮質性感覚失語に移行した1例 - 前頭葉症状の関与について -」はテーマのみとさせていただくが、興味深い内容であった。